

知られざるヴラマンク

自転車競技選手 / ボート競技選手

15歳頃に自転車を購入して夢中になり、1日中乗っていたこともあったそうです。19歳からは本格的に自転車レースにも参加しましたが、21歳の時に病気にかかり、以後選手の道を断念しました。

また、若い時には、生活費を稼ぐために、ボート選手もしていました。

自動車の運転

ヴラマンクは自動車の運転も好きで、妻とよく出かけていたそうです。画題を探す際にも利用していました。スピード狂だったようで、彼の車が通りすぎる際には、みな歩道に身をよせ、また同乗した友人の中には、あまりの速さにぐったりしてしまった人もいたようです。



自家用車の前でポーズをとるヴラマンクと妻ベルト・コンブ。
1926年頃

音楽家

両親が音楽家であったため、ヴラマンクは幼い頃から音楽に親しんでいました。生活が苦しかった頃は、ヴァイオリンを教えたり、カフェ・コンセルのオーケストラ等でも演奏をしていたようです。



第二次世界大戦前のヴラマンク
1939年頃

文筆家

画家以外の活動のうち、最後まで続けていたのが文筆家としての仕事でした。彼は言葉による表現も、絵画とならぶ自己表現のための手段とみていました。最初に出版された本には友人の画家アンドレ・ドランが挿絵を描いています。亡くなるまでに、20以上の作品を発表し、雑誌や新聞にも寄稿していました。ジョルジュ・シムノンなど作家の友人も多くいました。

その他 陶器に絵付けをしたり、演劇の舞台美術を制作したりもしました。作家のアポリネールとは仲がよく、彼が脚本を書いた舞台美術も依頼されたことがあります（実際には使用されず）。

日本との関わり

ヴラマンクを日本にはじめて紹介したのは、里見勝蔵（1895-1981）といわれています。里見はヴラマンクにオーヴェール＝シュル＝オワーズで偶然出会って以来、しばしば教を乞うようになります。里見はその後ヴラマンクに佐伯祐三（1898-1928）を引き合わせますが、自作を見せた佐伯に「このアカデミズム！」とヴラマンクが叱責したエピソードはあまりにも有名です。

多彩な関連イベントも開催予定

●講演会「ヴラマンク—色彩、そして道—」
日時：7月29日（日）14:00—15:30（開場 13:30）
講師：六人部昭典氏（実践女子大学教授）
会場：当館多目的室 参加料：無料
定員：70名（応募多数の場合は抽選）
申込締切：7月12日（木）必着

●当館学芸員によるスライドトーク
日時：8月25日（土）14:00—（40分程度）
会場：当館多目的室 参加料：無料（要観覧券）

●しずびオープンアトリエ
日時：8月7日（火）—19日（日）※月曜休館
①13:30—14:30 ②15:00—16:00
対象・定員：小学生以上 各回15名（申込不要・先着順）
会場：当館ワークショップ室
参加料：200円
（受付でチケットご購入の上、ワークショップ室へ）

●しずびチビッコプログラム
日時：9月15日（土）、9月16日（日）
それぞれ①10:30—12:00 ②14:00—15:30
対象：2歳以上の未就学児 各回10名
参加料：500円（保護者は要観覧券）
会場：当館ワークショップ室
申込締切：8月30日（木）必着

*この他、本展にあわせ「Shizubi シネマアワー vol.22」も開催予定！詳細後日HP等に掲載いたします。
*各イベントの申込方法等詳細は、HPまたはお電話にてお問い合わせください。

ヴラマンク展

絵画と言葉で紡ぐ人生

Vlaminck: Regards sur l'œuvre et sur l'artiste, 1907-1958



モーリス・ド・ヴラマンク《サイロ》1950年 油彩・カンヴァス フランス 個人蔵 ©ADAGP

2018年7月28日（土）—9月24日（月・祝） 休館日/毎週月曜日（ただし9月17日、24日は開館、9月18日（火）休館）

本展のポイント

- ①ヴラマンク独自の画風の形成の様子を、フォーヴィスムを離れ始めた1907年以降の作品でたどります。
- ②フランスやスイスの、日本ではまとまって紹介される機会の少ない海外の個人所蔵の作品を多数展示。
- ③各作品には、ヴラマンクの言葉を添えて展示するほか、彼の著書および日本での翻訳書を紹介するコーナーも展示室内に設置。知られざる「文筆家ヴラマンク」としての姿も紹介します。
- ④作家として、そして画家としての彼のまなざしが一体となって表されているといわれる、画家の最後の言葉「私の遺言」をヴラマンク自身が読み上げている音声をスライドとともに展示室内で上映します。
- ⑤当館が巡回最終会場です。首都圏以北での開催はありません。是非お見逃しなく！

静岡市美術館
SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

展覧会担当：小川・大石 広報担当：大庭・岡田 info@shizubi.jp
〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F
Aoi Tower 3F, 17-1, Koyamachi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN
tel. 054-273-1515（代表） fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

「私は決して何も求めなかった。総ては生活が私に与えた。私は私に出来る事をした。私は見るものを描いた。」

—Maurice de Vlaminck, *Mon testament*, in *Arts*, 8 janvier 1957 *「私の遺言」の最後の言葉。ヴラマンクの墓碑にも同じ言葉が刻まれている。

フランスの画家モーリス・ド・ヴラマンク (Maurice de Vlaminck 1876-1958) は、独学で絵を学び、20世紀初頭にマティスやドランらとともに、「フォービスム」で一世を風靡しました。その後セザンヌへの傾倒を経て、第一次世界大戦後はパリ郊外、次いでパリから100km以上離れた小村リュエイユ＝ラ＝ガドリエールに住まいを移し、抑制された色調や、スピード感あるタッチで田園風景や妻が活けた花束などを描き続けました。一方、ヴラマンクは絵画のほかにも、音楽や自転車競技など多方面で活動し、特に文筆家としては生涯に20点以上の著作を発表しています。彼は言葉による表現も、絵画と同様に自身を表すための重要な手段としていました。本展では、フォービスムから離れ、独自の画風を模索しはじめた1907年頃の作品から最晩年までの作品76点を、画家の言葉とともに紹介し、ヴラマンクの創作の深奥にせまります。

1. セザニアン期：パリ周辺 (1907-1916年頃)

- ・フォービスムから距離を置き始める
- ・セザンヌから影響を受けた、形態のヴォリュームを強調した、構成力のある作品
- ・パリ郊外のセーヌ川流域の風景を自転車で巡り、描く題材を求める
- ・1908年頃～：画商アンブロワーズ・ヴォラルが定期的にヴラマンクの作品を購入
→画家として生活をしていけるようになる



1902年頃のヴラマンク



1910-12年頃のヴラマンク



リュエイユ＝マルメソンのラ・ジョンシェールのセーヌ川沿い。ヴラマンクは1913年に住んでいた。

2. 第一次世界大戦後：ヴァル＝ドワーズとパリ周辺 (1919-1925年)

- ・パリを離れ郊外へ：1919年 ラ・ナーズ (ソスロン川流域)
1920年 オーヴェル＝シュル＝オワーズ (ゴッホ終焉の地)
- ・セザンヌの影響を保ちながらも、情感を込めたような、厚塗りの大きな筆致で対象を描き出す、独自の画風を作り上げていく
- ・題材 —セーヌ川やソスロン川の流域、村を横切る道、花などの静物
—雪景色：色彩の強いコントラストを表現できるため、以後特に好んで描く

「芸術作品は、ひとつの感動を、表現し、伝え、与えるということでは「存在」しえない。芸術作品とは、すなわち、それ自体が潜在的に持っている品質が、それ自体を珍しくか平凡に、または、低俗か高尚にするという意味で質的なものである。」—Maurice de Vlaminck, *Portraits avant décès*, 1943, p.119

3. シャルトル周辺、ノルマンディー、ブルターニュ (1925-1958年)

- ・1925年：リュエイユ＝ラ＝ガドリエールへ移る
- ・題材—自宅周辺の小麦畑や積み藁、サイロなどの田園風景
—自動車に乗って、200km以上もはなれた場所に出かけ、海景画や走行中に窓から見えた景色などを描く
- ・筆触—より密度が増し、
エネルギーで感情があふれるようになる
- ・色彩—以前よりも落ち着いた色調を用いて、
白のコントラストを際立たせる



《束ねられた麦のある畑》1950年頃
油彩・カンヴァス ラロック＝グラノフ・コレクション ©ADAGP



1928-30年頃 自宅の庭にいるヴラマンク



《漁船の帰還、ブルターニュ》1947年 油彩・カンヴァス
フランス 個人蔵 ©ADAGP

4. ヴラマンクの遺言

- ・「私の遺言」：存命中の1957年1月8日に雑誌『ARTS』に発表
最後の文章は、ヴラマンクの墓碑にも刻まれている (本リリース左上を参照)
- ・静岡会場では、ヴラマンクが実際に「私の遺言」を読み上げている音声を、スライドとともに紹介予定

展覧会情報

開館時間 / 10:00-19:00 (展示室入場は閉館の30分前まで)

観覧料 / 一般 1,200円 (1,000円)、大高生・70歳以上 800円 (600円)、中学生以下無料

*()内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 *障害者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料

前売券 6月15日(金)から7月27日(金)まで販売

取扱場所：静岡市美術館、チケットぴあ、ローソンチケット、セブンチケット、谷島屋 (バルシェ店、マークイズ静岡店、高松店、流通通り店)、戸田書店静岡本店、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店

*お得な一般前売ペア割チケット 2枚1組 1,800円

取り扱い場所：静岡市美術館、チケットぴあ、ローソンチケット、セブンチケット ※当日ペア割チケットの販売はございません。

主催/静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財) 静岡市文化振興財団、読売新聞社、Daiichi-TV

後援/静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本、静岡日仏協会

協力/エールフランス航空 AIRFRANCE

企画協力/株式会社プレントラスト

